

温古知新⑤ 南総里見八犬伝 1
笑顔礼讃西東

千葉番傘川柳会様(千葉県・千葉市) 2~3

佐藤茂三郎様(千葉県・柏市) 4

『喜怒哀楽』50号までの喜怒哀楽 5

投稿作品 6~10

心に残った作品 10~11

詠み人スクランブル(雨は好き?嫌い?) 11~12

ニュースあれこれ 13

お客様の「リレーエッセイ」 古谷力様 14

新潟ぶらり／坂口安吾文学碑／堀と柳の句碑めぐり 15

詠み人の「リレーエッセイ」 俳人岸本尚毅様 16

6

June
Vol.50

詠み人応援マガジン

詩歌俳柳壇ニュース



六月に入り、そろそろ梅雨真つ盛り。ということと、今回の「温古知新」は、そんな梅雨のじめじめを吹き飛ばす(?)物語、「南総里見八犬伝」のあらすじをご紹介したいと思います。

『南総里見八犬伝』(南総里見八犬傳)は、江戸時代後期、曲亭馬琴(滝沢馬琴)作の読本です。「里見八犬伝」、あるいは単に「八犬伝」とも呼ばれます。文化一一(一八一四)年に刊行が開始され、二十八年をかけて天保一三(一八四二)年に完結。全九十八巻、百六冊の大作です。さて、物語の発端となった部分をご紹介します。

時代は後花園天皇の頃。鎌倉の関東管領・足利持氏は関東自立の志を持ち京都の將軍に從わず、將軍家に攻め滅ぼされた。下総国の結城氏朝がその遺児を主君と仰いで持氏恩顧の武將とともに籠城し、京軍と戦うこと三年に及んだ(結城合戦)が、皆討ち死にする。

落城の日、里見季基は、嫡男・義実(よしざね)に「落ち延びて里見家を再興せよ」と言い残し、義実(よしざね)は戰場を離脱。三浦の海岸に。南へ飛び去る白龍を見て、導かれるように舟で安房に渡る。安房国は四郡に分かれており、平郡と長狭の二郡は滝田城主・神余光弘、安房郡は館山城主・安西景連、朝夷郡は平館城主・麻呂信時が治めていた。神余光弘は玉梓という美貌の妾に入れ込んで政治を忘れ酒色に溺れていたが、玉梓に取り入った家臣、山下定包が領主となり、玉梓を妻に迎えた。

ちようどその頃に安房に上陸した里見義実らは、神余の忠臣・金碗八郎孝吉と出会い、定包を攻め滅ぼす。城が落ちた後、哀訴する玉梓に対し義実(よしざね)は一度は許すと口にするが、八郎の反対にあつて前言を撤回。玉梓は処刑。玉梓は怨念を残して死んでいく。

やがて義実(よしざね)は結婚し一女一男をもうけた。伏姫と義成である。伏姫は三歳になるまで物言わない子であり、心配した母は靈験あらたかといわれる洲崎の役行者の岩窟へと伏姫を参拝させた。その帰り道、不思議な老人に百八つの玉(そのうち八つが仁義礼智忠信孝悌の文字が浮きだした数珠)とりの大玉)でできた数珠をもらう。この時以降、伏姫は口

温古知新⑤ 南総里見八犬伝

をきくようになり、すくすくと育つた。ある時、領内で一匹の犬が生まれた。狸に育てられた犬である。その噂を聞きつけた義実(よしざね)は、この犬を譲り受けて八房と名付けた。

ある年、安西領が不作となり義実(よしざね)はこれに米を送つた。翌年は逆に里見領が不作、金碗大輔孝徳(かねわん)を使者として安西景連に米を乞う。景連(かげつら)は「そとばかり軍をおこして滝田城を包圍。里見側は不作ゆえに飢えて戦う力もなく、ついに明日が最期という時を迎えた。この時、義実(よしざね)はたわむれて犬の八房に「景連の首をとってきたら伏姫の夫にしよう」と言う。この夜、本当に八房は敵將安西景連の首をとつてくる。

戦は里見家の大勝。義実(よしざね)は安房一國の領主となった。八房には恩賞を与えたが、まるで喜ぶ様子はなく、ある夜ついに八房は伏姫を押しこめ込む。伏姫は「君主の口から出た約束である以上、私は八房と夫婦になります」と言い、その夜、八房の背に乗って城を出ていった。八房こそ玉梓転生の犬、怨念の犬であったのだ。安房国富山の奥にある洞窟で伏姫は毎日読経をし、やがて八房も読経に耳を傾けるようになる。

ある日、仙童(せんどう)があらわれて伏姫に懐胎を告げる。伏姫は畜生(ちくせい)の子を懐胎(わたい)したことを恥じて自害しようとする。その時、谷(や)の向こうより金碗大輔孝徳(かねわん)の撃ちた鉄砲の玉が飛来し八房と伏姫に当たってしまった。八房はこの時に怨念が消えて成仏(ぶつ)した。しばらくして蘇生(そせい)した伏姫であったが、あらためて剣を腹に突き立てる。すると中から白気がたがたよい、伏姫の首にかけてあった数珠を空高く持ち上げた。やがて小玉百個(こたまひゃくこ)はからりと地上に落ち、仁義礼智忠信孝悌(にぎよれちちゆうしんこうてい)の文字が浮きだした大玉(おほたま)八つは遠く飛び去っていった。

自害しようとした大輔(おほたけ)を義実(よしざね)は止め、僧形(そうぎょう)となつた金碗大輔(かねわん)孝徳(こうとく)は、犬の字を二つに割つて、大と名乗り、八玉を再び揃えなければ安房には戻らないといつて旅立(たびだち)ていった。と、さわりだけでも壮大なこの物語ですが、書かれた時代が現代に近い分、読みやすいのではないかと思います。映画や人形劇にもなっている「八犬伝」。これを機会に、原作に挑戦してみませんか? (古川久美子)

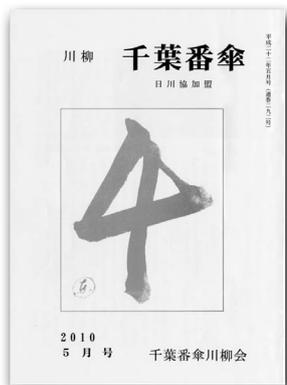
千葉番傘川柳会

会長 江口信子さま

(千葉県・千葉市)

少し汗ばむほどの陽気に、海からの潮風が気持ちいいところはJR京葉線稲毛海岸駅。毎月第二土曜日、高洲コミュニティセンターで催される千葉番傘川柳会にお邪魔して参りました。

千葉番傘川柳会は、江口信子会長が初代会長の夫の故江口東白さんと平成元年に立ち上げたのが始まり。平成8年より会長を継ぎ、会員の助力もあり現在に至っている。本日は出席27名と欠席投句6名。開始の午後1時前には、会場1階の休憩コーナーにはほぼ全員集合。時間になり教室に場所を移すと、程なくして黒板に本日の席題が「本音」と書かれる。皆さん真剣な表情で2時の締切までに2句をひねり出す。回収後にコピーし、各



▲毎月発行 通巻 292 号の最新刊

人に配布されると、今度はその中から5句を選ぶ。

講師は千葉県川柳界の重鎮、平井吾風さん。平井さんは以前千葉県川柳作家連盟会長をつとめ、日夜川柳の普及のため東奔西走を続けている。それでは、席題「本音」54句の講評を順番に――。



▲席題「本音」を講評する平井吾風さん

「本音」と「本心」は全く同じではない。「音」と「心」字が違うということとは意味が違う。音は口に出すこと、心は言わずに心の内に持つということ。今回はどちらもありということを読ませていただいた。

5点 不覚にもほんの弾みで妻に 遊希 なり

私なんかもその一人。女房の母親と大喧嘩して連れ去って結婚した。それも弾み。軽く言ったところにユーモアがある。

4点 老老介護本音を仕舞う場所 あき子 探す

夫婦でお互いを看ながら、時には「もうこれ以上やつていけない」と思っていることも。でもそれは口に出してはいけない。その本音を仕舞う場所もないまま必死に介護している。重い句だが「本音を仕舞う場所探す」がいい。

9点 良く釣れる場所は誰にも教 貴美雄 えない

本心で本音。こういう人はそもそも人と一緒に釣りに行かないでしょうね。

9点 肩書きを捨てて本音が踊り 好美 出す

言いたいことを言えたらいいですが、そんなことばかりしていたら、人間失格の烙印を押されかねない。そうなれば



▲9点句の好美さん

いいなーという願望。

7点 優しさの笑顔が隠し持つ本 みち野 音

男性は特に女性に弱いからペラペラと本音をもらしてしまう。その辺りがこわい。

6点 笑ってはいるがあきれている 砂都市 本音

これも笑いながら「そうよそうよ」と言っているが本音は違う。

5点 意地悪をするから好きとす しゅん ぐん



▲司会のあき子さん(右) 文台のひろしさん

好きだからいじめる、思春期くらいによくある情景。我々の年代でしたらおかしい(笑)

2点 イケメンが言うと本音のよ 好美 うに聞く

テレビでもイケメンが出てくると会場はキヤーンとなり、女性はうなずいたりしながらよく聞いている。

5点 キムタクがなにさ男は顔じゃ 幸守 ない

ハイハイと(笑)。私も同感だが、これは負け惜しみ。2つの句を並べるとなかなかおもしろい。

5点 先に嫁ぐ妹へ笑みぎこちな 信子 い

女性の気持ちはわからないので、私ごとやかくいう筋合いではありませんが(笑)。ただ、嘘も方便で楽しく送り出したと、温かく詠んであげた方が読後感としてはいい。この場合は「本音」だからいいけど。

3点 言う前にもう見抜いている ひろし 古い妻

中7までいい。でも「古い妻」は奥さんに失礼でしょう。じゃあ新しい妻もいるのかと言いたくなる(笑)。「古女房」でしょうね。

5点 まな板に妻が本音のにぶい 砂都市 音

おもしろいね。まな板に刻まれるのは、どういう音だろう。

2点 少し利口になって本音を減 圭子 らそうか

東西讃礼顔笑

7・7・5のこういう表現の仕方もある、という例。

7点 大失態マイク外さずつい本音
健二

イギリスであったね。大変なことになった。

4点 嫁の留守姑もホツと息を抜く
淑子

本音というより本心。今の時代は反対かも。

4点 隠し持つ本音は母の玉手箱
みち野

きれいな言葉でうまく逃げましたね。

3点 柩まで本音を隠す夫婦仲
覚

昔は墓場までだったけど、柩で終わっちゃうの？(笑) 最後の最後まで本音を言わずに終わったというこ

と、少し寂しい。

4点 何事も本音で言える俺おまえ
義弘

そう言い合える仲、すばらしい。

2点 ここ一番腹におさめてある本音
淑子

水戸黄門の印籠みたいなもの。

6点 しまったた本音がポロリ出た不覚
信子

つつい出てしまった、何で出たのかな。

2点 酒の席ポロリ零すは本音なり
まこと

酒の席の失敗は男につきものだけ

ど、用心した方がいい。「なり」と言いきっているおもしろさがある。他にも

5点 夫婦仲本音ちよつびり出し
平和

3点 つい本音洩らした総理四面楚歌
まこと

3点 本音にはいつもかけてるオブラート
青人

3点 商いはボチボチですと顔拭い
しゅん

…等々。

その後は、宿題3題、各3句の中から選者が30句を選び披露する。

★「占う」大堀貴美雄選

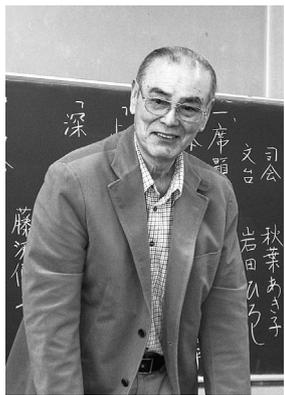
社長にも成れる手相で首切られ

来る来ないそのうちやつて来る眼

街角の景気占う靴磨き
弘明

ジョーカーを掴む別れの予感する
淑子

選者吟 おみくじは吉が出るまで引き続け
貴美雄



▲「占う」の選者貴美雄さん

★「深い」2人選 本田哲子選

深そうな海へ身投げが怖くなる
藤沢健二選

深く掘り基礎を固めて建つタワー
圭子

太陽の温さ知らない深海魚
寛治

深かった筈浅かった夫婦仲
貴美雄

隠しても欲の深さは顔に出る
しゅん

責任は夫私の深い皺
遊希

深追いはしない互いの臍の傷
覚

選者吟 菖蒲湯で根深い不信もみほぐす
弘明

選者吟 友情に修復できぬ深い溝
哲子

選者吟 友情に修復できぬ深い溝
健二

選者吟 友情に修復できぬ深い溝
哲子さん

選者吟 友情に修復できぬ深い溝
健二さん



▲「占う」二人選の選者 健二さん



▲「占う」二人選の選者 哲子さん

★「自由吟」江口信子選

芸の人歌舞伎役者にある苦勞

今日こそと勝負の赤い紅を引く
みち野

好美



▲「自由吟」の選者 信子さん

欠点をさらすと人が寄りやすい

不祥事の眼鏡黙って拭いている
砂都市

選者吟 そよ風へ笑顔を返す散歩
青人

道
信子



▲頭に汗をかいたあとは実においしい！元気の源

■その後は、会場を「天狗」に移して懇親会。兄・妹で参加されている方、以前新潟に住んでいらした方、飲みそうもない雰囲気ではないかな、飲み口の女性など、意外性が垣間見られる宴席はやはり楽しく意義深いもの。人生の小さな傷や喜びを川柳にのせ、心をうるおし喉をうるおし、明日の活力につながる。ガス抜きと、燃料補充と、人間礼讃の一挙両得の一日でした。(木戸敦子)

東 西 讚 禮 顔 笑

佐藤茂三郎さま

(千葉県・柏市)



▲何でもやろうと思うと機会がある、と語る茂三郎さん



▲所々に娘さんの描いたイラストを入れた詩集『郷愁』

なくとも、詩は心情を理解できるのか、詩集を読んだくれた寿司屋の主人が「泣いて眠れなかつ

40年近いサラリーマン生活を終える際、記念に詩集『郷愁—今日までの一期一会』を上梓し、その後22年。この度、年齢的な区切りを機に再版された佐藤茂三郎さまにお話を聞きました。

青空に映える白亜の邸宅は、玄関に至るまで季節の花々であふれ、車庫は園芸作業場に転用されている模様。開口一番「今日筍も買ったんだけど好き？」の言葉に続き、「じゃあ食べてよ」と、筍のお吸い物、煮物、柏餅、お抹茶と次々に供される。一朝一夕ではない腕前に舌鼓を打ちながら、普段の生活のお話から。

■どのような毎日？

一人暮らし（奥様13回忌、娘さん23回忌）だから気ままなもの。夜中の1時に起きるので6時半には床に入る。起きると家計簿と日記をつけ、新聞を読み、4時頃朝食を仏壇に。お墓も近くて毎日のように行くから近所の人が「佐藤さんのところの亡くなった人はお幸せね」と。そのうちに孤独死をしていないか心配してくれる俳句仲間から

毎日モーニングコール。庭仕事や購読している種々の俳句雑誌に目を通し投稿し、パソコン教室に行ったり、買物したりして帰り、昼は簡単な食事を仏壇に上げる。「時は待たない、戻らない」を信条にしているけど、ボランティアでしている俳句教室や、芝居や文楽、クラシックのコンサート、シルバー大学院に行ったりと、やりたいことでスケジュールが追いつかない。

■三度三度仏壇に上げているのですか

生きていた時と同じ生活をしてほしい、愛した愛さない以前の問題で、二人とももう戻れないんだもの、可哀想だよ。だからおかずは何でも作るし、買う事は100%ない。那須の麓の小作農の生まれだから、父も母も早くから遅くまで働いていた。帰ってくるまでに朝飯と夕飯を作っていた、そういう経験が今ものすごく役立っている。ただ掃除だけは苦手でこの有り様(笑)。

■詩はいつから？

45年前、サトウハチローの本郷弥生町のお宅に週1回通い師事を仰いだ。芥川賞に応募したり、太宰が自殺したときは跡を追おうかと真剣に悩んだり、文芸に憧れていたんだね。でも、ハチローとモサブローでは大違い、とよく言われた(笑)。詩は感性の問題で今は作れないから俳句一辺倒。俳句はわからなくとも、詩は心情を理解できるのか、詩集を読んだくれた寿司屋の主人が「泣いて眠れなかつ

た」って。同じ世代で同じ経験をしているから心に沁みるのかも。

■ずっと詩を？

ミツワ石鹸に就職し、その後P&G（プロクター・アンド・ギャンブル/Aメリカに本拠を置く世界最大の一般消費財メーカー）と合併。周りは外人で会話も書類も全て英語。家庭教師をつけたり、会社に行く前に個人レッスンを受けたりと英語にどれだけつき込んだか。今はしたくもないけど(笑)。だから、詩どころではなかった。57歳の時、急性骨髄性白血病で24歳の一人娘を亡くした。花嫁衣装を残して。失意ながらも失業保険をもらいに行った職安でスカウトされ(笑)、高齢者職業相談室の相談員として7年間。その後、国民健康保険の50年史作成の編集者に応募。「私を雇って損はしない」という手紙と、以前入賞した老人問題の論文等を送ったところ「明日から来てくれ」と。未経験のうえ、採用条件は35歳までなのにな(笑)。永田町の生活が楽しかった。

■チャレンジしつづけていますね

「いつも忙しくしていいね」と言われるけど、やる気があれば何でもできるし道は開ける。開こうとしないだけ。最後まで精一杯生きてそれで終わり。人生に余生はないと思う。だから息子には絶対葬式はするなって言っている。死んでから泣いてもらって何にもならないし、今日の精進料理少なかったね、なんて言われるのいやだもの(笑)。これからは、やはりものを見て、書いて自分の教養を高めていきたい。本は絶対に読まない。あとは最後に支え合い尊敬

できる友達が必要。そういう気心の知れた仲間が「平成の松尾芭蕉」と称する★お仲間が「机上にはお友達に送る誕生日カード、トイレにはお庭の可憐なすずらん、お抹茶が終われば晩茶と、無意識の細やかな心遣い。外資系企業で培ったであろう自己アピール力と、情にあふれた繊細さ、それが独特のモサブロー節と相まって、出会った人を魅了する。前に進む力が放つ刺激と人間的奥行き、またお会いしたいと素直に思える方でした。(木戸敦子)

詩集『郷愁』より

爪

時に 手にしてはなぞる爪
色褪せ ぬくもりもない半月形
ちいさく 軽すぎる
和紙に包んだ爪 父のかたみの爪
時は早くすぎる

五年前 旅先への計報
夜汽車の窓に弾けていた 雨つぶで
こらえつつの 慟哭
今年も その日が近い
書き続けた 日記帳
捲れば

涙の滲んだ その日の空白
埋められなかった 父への鎮魂の白いページ

時に 手には 今もなぞる 爪

何時か

何時か 母の爪をも削ぐのだろうか
思う心に

—みちのくの濡れ雪と 母の映像を重ねる

投稿作品

※今月も、みなさまから沢山のすばらしい作品を投稿していただきました！
今後も、みなさまの投稿をお待ちしております。
次回掲載分は7月15日(木)締切です。

俳句

- 1 咳の子の名前は太郎一年生
小島岳青(新潟県)
- 2 山肌を風走りくる竹の秋
木山杏理(東京都)
- 3 花冷えや会いたき人に会えぬまま
長谷川ふさを(新潟県)
- 4 鬱天を晴るく桜や息かよひ
村木尚(新潟県)
- 5 サクラ咲くコトバはココロ、ココロはコトバ
小俣英之助(大阪府)
- 6 平均寿命ことなくクリア青き踏む
吉村筑紫(埼玉県)
- 7 しんかんと空透きとおる花吹雪
棚橋麗未(東京都)
- 8 振り返り望む天守や花の雲
津布久信雄(東京都)
- 9 転がして焼くソオセイジ日脚伸ぶ
原田麦吹(埼玉県)
- 10 幼子の顔みな老いにけり若緑
内河邦久(東京都)
- 11 芍薬を活けし古民家薄明り
佐瀬チエ子(神奈川県)
- 12 職立つ句会の窓にちと触れり
浜田蛙城(静岡県)
- 13 少年の坊主頭に春の雷
中嶋清子(佐賀県)
- 14 出番待つ南瓜ごろりと舞台裏
池戸喜美子(長野県)
- 15 托鉢の僧身しるがず奈良の春
佐野和彦(静岡県)
- 16 畔焼きを始む夕日を見送りにて
氏江省吾(新潟県)
- 17 春潮の太平洋を抱く龍馬
武市愛子(大阪府)
- 18 幸せは得意のうたた寝春炬燵
布日雅之(埼玉県)
- 19 霾や滔々流る信濃川
竹本美美子(新潟県)
- 20 壺焼や近きにとつと怒涛音
大谷茂(埼玉県)
- 21 舟を漕ぐ母に倣いし牡丹かな
星野三興(新潟県)
- 22 咲くを待ち散るを愁ひて花の日々
井原毬子(東京都)
- 23 袷立て、桜見物寒気流
樋口孝子(新潟県)
- 24 別れ雪観桜のはずが湯の旅に
高橋トミ子(山形県)
- 25 京の苑枝たおやかにいと桜
大場きよし(宮城県)
- 26 祖母亡くて春の日傘の残りけり
鈴木蝶次(宮城県)
- 27 逝く春や古代を偲ぶ水城址
濱田イサオ(福岡県)
- 28 五月雨に濡れし独居の路地の裏
忍正志(兵庫県)
- 29 開拓の大地の鼓動下萌ゆる
田中昶(鳥取県)
- 30 風来坊と花を見てゐる風のなか
磯村鉄夫(愛知県)
- 31 畔走る筆箱の音新学期
三津木俊幸(千葉県)
- 32 小さき胸はちきれさうや入学す
臼井正通(埼玉県)
- 33 初蝶と乗る一湾のたらし舟
川口襄(埼玉県)
- 34 独活の香の走りてきたる老いの鼻
青木日出男(群馬県)
- 35 春の潮黒き魚群を追う鶴たち
中村和弘(愛知県)
- 36 触れる手の外すを忘る花疲れ
浦橋克行(兵庫県)
- 37 旅半ば逃げ水追し未知の町
油谷郷史(兵庫県)
- 38 エトランゼ一ト夜を恋し雪をんな
菊池シユン(青森県)
- 39 雨ごとに色重ねゆく新樹かな
椿原富久子(大阪府)
- 40 黒土にのぼるかげろう雪の果
木村俊彦(奈良県)
- 41 馬酔木咲く青梅の里の蔵造り
須田洋子(埼玉県)
- 42 春うらら道行く人も楽しそ
河合ヤスエ(大阪府)
- 43 山桜のびのび育だち山の空
谷川利子(愛知県)
- 44 散るさくら残るさくらも雨の中
川崎洋吉(福岡県)
- 45 岩燕かすめる雨の磨屋仏
関谷秀二(愛知県)
- 46 待合室幼女の振舞い蝶のごと
佐野しづ子(愛知県)
- 47 あるもので済ます生活や昭和の日
羽根田明(神奈川県)
- 48 カトレアの紅く輝く夜明前
小井寒九郎(三重県)
- 49 雛飾るいまなほ娘あるごとく
伊藤修敬(三重県)
- 50 畳屋の深き廂に燕の巢
三ツ木宗一(東京都)
- 51 似顔絵の父は猪首に種案山子
津田忠彦(岡山県)
- 52 わが愁ひ神にあづけて花に佇つ
廣瀬喜代子(岡山県)
- 53 人妻の宇宙遊泳月おぼろ
坪田勝秀(鹿児島県)
- 54 ダイチャンと初めて呼ばれ風光る
吉村充治(埼玉県)
- 55 君の胸ほおずる如く林檎食む
五十嵐睦博(新潟県)
- 56 夕間暮耕しの音ちりぢりに
安藤まこと(岩手県)
- 57 風に舞ひ散りて集る花筏
檜山とり子(東京都)
- 58 夏めくや光る葉波に鳥惑ふ
千代田栄次(東京都)
- 59 大型の連休間近に雪来襲
岡弘子(埼玉県)
- 60 燕さつと低空飛行明日は雨
勝田久美(大阪府)
- 61 魚は氷に近ごろ多き物忘れ
藤沢樹村(東京都)
- 62 老木はずしりと重し雪の果
阿部幸子(宮城県)
- 63 花は葉に久に逢ふ友われも老ゆ
堀木和子(大阪府)
- 64 青春に忘れものあり夕桜
中野博夫(埼玉県)

- 65 入院の母を見守る桜かな
早矢仕邦夫(愛知県)
- 66 千姫もこの櫓より花月夜
山本直子(大阪府)
- 67 落花しきりシヨパンの調べ流れきて
清水喜代子(岡山県)
- 68 鐘楼の古き由緒や松の芯
谷野秀子(奈良県)
- 69 地に落ちて空を見ている椿かな
井上静夫(栃木県)
- 70 このままの位置がよろしい老ざくら
阿部静子(北海道)
- 71 良いところ探せばハッピーねぎ坊主
丸山ちづ子(埼玉県)
- 72 満開の花を両手に酔い心地
神作洸江(埼玉県)
- 73 風の筋見ゆる外濠花筏
松嶋光秋(東京都)
- 74 山巒を攪りゐたり薄霞
岩村昇(神奈川県)
- 75 海神の灯明ゆらり春の宵
木田亜津子(神奈川県)
- 76 空の青海の碧さに青き踏む
上谷すみ多(神奈川県)
- 77 春の宵遙けき空に鐘一打
阿部澄江(宮城県)
- 78 春までの道程けわし羅臼岳
堀田寿美子(北海道)
- 79 春昼や大学前の古本屋
鈴木与平(宮城県)
- 80 芹摘むにかがめば土と日の匂ひ
駒場京子(神奈川県)
- 81 花冷えや道端の供花新しく
長峰正晴(千葉県)
- 82 山畑に老体のかけ麦青む
寺岡文生(静岡県)
- 83 金管も木管もあり虎落笛
居原田連星(大阪府)
- 84 折りたたむ紙の雛に命こめ
秋谷静子(茨城県)
- 85 向去りに萬緑落す雫かな
百花清(埼玉県)
- 86 初まきやすべて順調体調良
延原令岱(岡山県)
- 87 チューリップゆつくり廻り風車塔
原田かず多(千葉県)
- 88 落慶の稚児行列に花の雨
佐藤茂三郎(千葉県)
- 89 なにごともなかりしさまに鳥雲に
能條憲夫(神奈川県)
- 90 老碌の花名返上緋木瓜かな
早川レイ子(新潟県)
- 91 踏むまいと運ぶ歩みのすみれ草
山川みどり(山形県)
- 92 初桜宇宙で俳句詠みし女
小林七重(新潟県)
- 93 春服や確かな友のかほりして
安木沢修風(新潟県)
- 94 天空に若しや巢のある揚雲雀
磯部力(新潟県)
- 95 電車ゆれ春眠ゆれて心地よく
杉村美保子(岩手県)
- 96 池の面に夕日をあびて花筏
長谷部喜代子(大阪府)
- 97 青空に櫻の枝の幾何模様
木下精(大阪府)
- 98 揺れ動く世相を背なに卒業す
野村牟人(東京都)
- 99 花を観むわが杖ゆけるところまで
白鳥光雄(青森県)
- 100 無事帰国メール送って桜東風
北嶋八重(京都府)
- 101 母の日や征く朝光る涙あと
菅井文男(新潟県)
- 102 柿若葉日毎まばゆく孫ふたり
岸田晴代(奈良県)
- 103 誰しものがスターなり桜吹雪浴び
渡邊昭雄(東京都)
- 104 一人子を見送る母や鳥雲に
大下志峰(福井県)
- 105 いつか逝く浄土も斯くや花吹雪
村松知津子(大阪府)
- 106 料亭はもと大使館桜鯛
安達幸代(静岡県)
- 107 土筆摘むあと十年は摘みます
増田とみ多(大阪府)
- 108 せらぎは夢のあとさき辛夷咲く
林克(福島県)
- 109 林間の莖色濃く薄日射す
神一男(静岡県)
- 110 眼の下のホクロは母似母の日来
高杉杜詩花(北海道)
- 111 さりげなく赤い橋去る修司の忌
福岡悟(東京都)
- 112 力瘤見せて五月の来りけり
新井竜才(埼玉県)
- 113 持てるだけ持ち娘の家へ春野菜
山岸伊久雄(東京都)
- 114 百幹の竹に昂る春北風
小野寺裕子(宮城県)
- 115 今日よりは恋する乙女夏来る
堀井醉人(茨城県)
- 116 たんぽぽの絮と戯る白い息
富山尚子(東京都)
- 117 新芽折る人の心の荒みてか
辻升人(東京都)
- 118 セルを着て昭和を生きた母恋し
村上千代(大阪府)
- 119 遅日かな昭和飛び出す鳩時計
行方素芳(東京都)
- 120 矢車や五歳になりし自慢の児
齊藤安弘(神奈川県)
- 121 バラ一輪笑窪をそへて送られし
橋本まこと(栃木県)
- 122 銭取とふ葵と菱の合戦趾
白井無窓子(静岡県)
- 123 卓袱台にナイフとフォークへツッパ
ン忌
湯浅芳郎(岡山県)
- 124 春の夢紅ひく母の手の白さ
大久保アヤ子(東京都)
- 125 散歩道心地よき香の花茨
藤田君江(東京都)
- 126 あいうえお上手に書いて五月来る
宇田川正雄(埼玉県)
- 127 たんぽぽの王かん作ってかわいいな
高松愛(神奈川県)
- 128 野地蔵も鳥啼く声もかけろへり
田島星景子(宮城県)
- 129 ニコライのクルスに近く春の星
針ヶ谷里三(東京都)
- 130 十字架に雷雨イエスも肉肋
諏訪杜夫(埼玉県)
- 131 神田川けふは花散る川となる
大阿久雅子(東京都)
- 132 鞆を漕ぐいまのこと先のこと
中岡昌太(神奈川県)



- 133 デイケアの春のカラオケ「海ゆかば」
柳澤京子(宮城県)
- 134 糺ぐもりいつまで続く亀の思惟
炭崎博(滋賀県)
- 135 花揺れてをり青空の揺れてをり
木村真澄(埼玉県)
- 136 雨音の春近づけて遠ざけて
藤田照代(岡山県)
- 137 山門を抜けて濁世へ蝶の昼
西村けい(茨城県)
- 138 あいの風吸えば行きたし万代橋
中川平治(東京都)
- 139 溶岩散乱丘陵渡る春の風
梶鴻風(北海道)
- 140 早朝の雪の積もりし八重桜
小山たけし(埼玉県)
- 141 糺やシルクロードは遠けれど
小田真佐代(大阪府)
- 142 春満月神も仏も微笑めり
大井光隆(神奈川県)
- 143 藤の花雨の匂ひの息を吐く
堀たかこ(大阪府)
- 144 戸惑へる野点の席次花衣
有坂馨園(福島県)
- 145 針魚の群れて水面の空をゆく
四宮陽一(京都府)
- 146 沼杉の淡き色映え水温む
竹内ハヤ子(埼玉県)
- 147 夜は宙に花のみ揺るる糸桜
木村貞恵(静岡県)
- 148 そつと触れ椿の落花崩れけり
藤井春三(埼玉県)
- 149 爆音の遠く消えゆく芽立時
矢野絹枝(東京都)
- 150 草取るや隣りにつばめきて休む
井口武重(新潟県)
- 151 よみがへる雅楽の系譜竹の秋
萬濃その子(千葉県)
- 152 峡に生れ峡より出でず種を蒔く
渡辺嘉幸(東京都)
- 153 松林凶春なお暗き風の音
望月哲土(東京都)
- 154 春愁や黍魚子海の色もてり
宮川昭男(高知県)
- 155 亡き父の好いことばかり偲ぶ春
五十嵐勝敏(新潟県)
- 156 料理法ばかり話題に姫薊
佐藤信(神奈川県)
- 157 日傘閉じ野点の客となりけり
関口修一(群馬県)
- 158 夜桜や仰げば声の出でしまふ
重原昇(新潟県)
- 159 一声は挨拶なのか初燕
北村純一(神奈川県)
- 160 新緑やスカイツリー伸び盛り
佐藤君夫(千葉県)
- 161 鳶の輪を見れば卯波の砕けあり
野中良巳(神奈川県)
- 162 柿若葉陽ざしに強き影おとし
須澤重雄(長野県)
- 163 産声や人を繋ぎて梅香る
小路ふじ子(兵庫県)
- 164 水平線釣り舟うらら白き雲
仁藤ひろじ(埼玉県)
- 165 殉国の碑に寄り添ひて八重桜
今井勝子(新潟県)
- 166 囀の指揮者然たる大椿
池本勇(大阪府)
- 167 やはらかき風の渡れる庭新樹
野原香雪(北海道)
- 168 桜吹雪ただ中なるはあの世かも
真貝葉月(新潟県)
- 169 花筏鹿鳴館はこんなもの
岩田信(神奈川県)
- 170 語りきる身の上話日永かな
岡村君枝(茨城県)
- 171 風遊ぶ高きに松のみどり摘む
本間七窪子(山形県)
- 172 新緑へ赤き車の疾走す
古谷力(東京都)
- 173 山程の薄墨色の名残り雪
星一子(神奈川県)
- 174 青嵐有難いこと雨蛙
五味田幸夫(栃木県)
- 175 ポケットに句帖しのばせ春の瀬戸
浅野信廣(宮城県)
- 176 告知受け心うつろに氷面鏡
柴田恵美子(北海道)
- 177 共に泣く介護もありて桃の花
山崎鶴恵(鹿児島県)
- 178 つと魔羅のせせら笑いや朝焼る
椋本望生(大阪府)
- 179 もんぺ穿く吾に驚く初蛙
石川郁子(埼玉県)
- 180 葉桜や喘息もいえ退院す
塩田澄子(千葉県)
- 181 一瞬は風の形か花吹雪
竹澤茂子(大阪府)
- 182 廃校となりにし校舎燕来る
田野井一夫(栃木県)
- 183 春眠やあの世この世をひとまたぎ
増本和子(千葉県)
- 184 知らぬ子が挨拶くれる青田みち
北野耕兵(千葉県)
- 185 地虫出づ今ここにゐるといふ不思議
長島保子(東京都)
- 186 嵯峨豆腐はや売切れて花の雨
古郡孝之(埼玉県)
- 187 薄暑かな釣り人竿を休ませて
村上幸枝(大阪府)
- 188 濠に向く清麻呂像や水ぬるむ
小林紀美子(東京都)
- 189 遠景は橋のない川昭和の日
早乙女文子(埼玉県)
- 190 山吹やここから一里入ります
高垣勝代(大阪府)
- 191 よべの雨上り新樹の息遣ひ
田中敏晴(奈良県)
- 192 鳥雲に竹馬と友と句を競ひ
池上秀子(高知県)
- 193 先達の書幅賜りあたたかし
吉澤昌美(長野県)
- 194 葉桜や人を待つ髪指で梳く
山本せつ子(鹿児島県)
- 195 紙ふうせん畳まれてあり葉箱
伊藤みさ(静岡県)
- 196 春雷に鉞投げ走る木の下へ
早川述史(愛知県)
- 197 崩したくなくて牡丹を映しをり
野別忠孝(埼玉県)
- 198 葉桜のひとつと息つくや団子食み
福田和子(東京都)
- 199 山独活や鈍感力を授かりぬ
井田由利子(宮城県)
- 200 夜の客送りて春の月天心
春口蓮男(静岡県)

201 松の芯みな一天を目ざしおり
片岡瑠璃子(大阪府)

202 風薫る一ト日主婦よりガーデンナー
久世しずか(埼玉県)

203 寄贈して水都に託すゆめ桜
中山日出子(大阪府)

204 日永日や一日でぞ成る里景画
小林敏宏(長野県)

205 早春の雨に艶めく端山かな
野中信夫(東京都)

206 掲示板こいのぼり絵の行事表
梅津陽子(千葉県)

207 万愚節地球担いでみたくなり
松木建二(東京都)

208 里山の豊かなる日の山ざくら
近藤美好(新潟県)

209 富士箱根天城連山夏来る
杉浦俊雄(静岡県)

210 歓声も桜の花も迫りくる
出井静枝(三重県)

211 晩春や武人のごとき執刀医
柚山美峯(東京都)

212 蟹気楼一期一会の人だから
伊藤梅子(岩手県)

短歌

213 社会主義壊れた国の借金を返す自
分とお腹にいる子 大川聡(新潟県)

214 かがまつて幼とおなじ視野のなか小
石も草も鮮しく見ゆ
野木宗信(奈良県)

215 原稿を出し終へて眠り足らひたる
今朝思ひがけず友の訃聞けり
木暮珣子(群馬県)

216 テレビには出られませんがこつこつ
ともう充分に活躍をした
梅澤鳳舞(埼玉県)

217 おはようございませう大いなる声少
年よそのこと嬉し見守るわれは
藤原昭三(滋賀県)

218 死産の子立たせむと母牛狂いなく
にいたがり殺すは人間の親
黒澤正行(福島県)

219 幼名を呼ばれてたちまち蘇える十
五の春になりたり
土屋喜雄(山梨県)

220 小海線信濃鉄道と乗りつぎて花さ
まざまの桜みてすぐ
佐々木都(長野県)

221 大それた望み夢見つ生きる身に確
かな明日よ微笑みてくれ
山本敏順(長野県)

222 姪の子に見舞いにメロン届けたが気
になる味の知らせを待つ身
佐藤佑子(福島県)

223 咲き満つる辛夷の下に集きて歌う童
に春の陽やさし 櫻井文子(東京都)

224 生くる馬鹿死ぬばかどこかでV O I
と汽笛が鳴るではないか
北岡晃(兵庫県)

225 桜咲く入学式は肌寒き雨の午後な
り一年生の末孫 高須孝(愛知県)

226 はらわたに激しき振れ続べがたき
思い戻さへて捕虜となりたる
鈴木清美(愛知県)

227 裾野焼く音より早き野火の舌光り
となりて枯野を走る
寺尾令子(東京都)

228 満開の花の季節に逝く友へかける言葉
の無きぞ悲しき 紺谷睡花(東京都)

229 その順にこだわりを持つことのなき
鳥たちの列終業式の日
安部龍太(山梨県)

230 鷺色の夕焼け雲の彼方に童のたわむ
れ風と流れゆく 三浦博(岩手県)

231 七夕に生まれし伯母よ頑張つて伯
父のもとにはまだいかないで
大橋絵代(千葉県)

232 深ぶかと山の気を浴び箱根路を巡
りて花を愛でつときはひ
竹野紀子(東京都)

233 戦友会もクラス会も解散すわが家の
庭の桜見上げて 久保和友(滋賀県)

234 終の日に死出の緞帳ひき上げるわ
れの舞台を仕切るは誰ぞ
寒川靖子(香川県)

235 言い合いの最中ピンポンピンポンに
変わる空気の柔らかきかな
斉藤慎悦(秋田県)

236 弘法寺の伏姫桜咲き満てる初めて
訪ひし真間の里かな
堀井和(神奈川県)

237 物や人すべてと別れ軽くなり旅へ飛び
たつ三歩前進 田村淳子(新潟県)

238 春うらら青空もどり川べりへ行つて
みればや鮎がつれてた
渡辺勇治(埼玉県)

239 雪解けの水音高き春の橋ゆつくり
渡り父母の墓参り
武田東洋一(山梨県)

240 先見の明男爵の素晴らしき棺にいね
て棺に目醒む 緑川浩明(東京都)

241 卯月とはほんの名ばかり雪の舞え
風に散らさる梅花とも見ゆ
田中豊恵(新潟県)

242 目覚むれば雨となりをりをりまたうら
に牡丹の花の白く崩るる
吉野成行(愛知県)

243 窓のなきビジネスホテルの狭き部屋
にもどりきてまた一人雨の夜
桑原謙一(群馬県)

244 挨拶を交せし人の名浮かび来ず心
陥ち込むままに歩けり
吉田ゆき(新潟県)

245 いにしえの都をあとにはるばると仏
のひとみに我映る
若月理依子(新潟県)

246 大声で叱つて論し握手して孫のあり
けり愛しさの増す
北村富士雄(新潟県)

247 豌豆は真白き蝶の花つけてさやか
に澄める朝の光 高橋邦子(高知県)

248 六十五年前のこの朝に知人探し焼
け尺くされし下町に立つ
今井忠一(東京都)

249 留守電に会わせたい人いると云う
くり返し聴くわれ五月晴れ
岩崎令子(大阪府)

250 茎無しの枝分けに咲きし鉄線や狂
季に適応生の妻まじ
小黒深雪(新潟県)

251 公園の隅にありても咲きほこる木
蓮めである人のあるかや
椎忠夫(神奈川県)

252 蒸気吹く圧力釜の音に合ふ君が歌へ
る歌がやさしく 小島秀雄(福島県)

川柳

- 253 バックオーライイヒこ口笛でピッピッピッ
大橋恒次(新潟県)
- 254 小半日病院だから待っている
羽田桐柳(群馬県)
- 255 男には超えねばならぬ山が有る
大江秋月(兵庫県)
- 256 小さいが信用されるお水の店
宮崎正男(群馬県)
- 257 地下鉄の路線図にある標高差
丸山芳夫(東京都)
- 258 その先をもう読んでたか妻の勘
石原学(群馬県)
- 259 鉤掛け削節だと孫がいい
戸田英夫(愛知県)
- 260 軍配を持って行司は逃げ回る
鈴木青古(茨城県)
- 261 嫁はんの喜怒哀楽は慣れました
勢藤隆(群馬県)
- 262 新曲に合わず手拍子難しい
斎藤和子(新潟県)
- 263 基地に揺れ朝言暮改山笑ふ
山東爺(北海道)
- 264 年一度春風にあう蔵の雛
大岩歌子(岡山県)
- 265 「おいお茶」言えば即座にでるポトル
大竹和男(新潟県)
- 266 目に青葉赤い字続くカレンダー
村瀬憲正(岡山県)
- 267 この笑顔遺影にするにまだ堅い
田澤宏(新潟県)
- 268 天下り追求しても数の中
野田明夢(新潟県)
- 269 身の奥の奥まで水の重みある
鈴木義雄(福島県)
- 270 手紙書く事も出来ない人が居る
近藤はつみ(福岡県)
- 271 友にかけたい頑張つてではない言葉
小山恵美子(大阪府)
- 272 寒風をくぐり人間深くなる
天広愛子(広島県)
- 273 好きですと言えずそのまま半世紀
山崎一嘉(愛媛県)
- 274 美しき死への旋律花の舞
長尾俊彦(香川県)
- 275 仕分人己の事にはふれません
中森儀雄(三重県)
- 276 前掛けを春着と笑う村地蔵
工藤昌見(山形県)
- 277 嬉しきの尺度は妻が持っている
中島久光(岩手県)
- 278 「とさえ」逝き老の坂道一人ぼち
奥那於子(大阪府)
- 279 妻の死後思考力まで喘ぎだす
藤井北灯(福岡県)
- 280 鬻られた脛にも欲しい補償金
沢井博(群馬県)
- 281 ぶら下がる努力はしてるナマケモノ
岡部則正(千葉県)
- 282 難民の悲しみ宿る幼い眼
中林恵子(大阪府)
- 283 足腰も脳も耳目も更改期
森本遊笑(兵庫県)
- 284 初キッスなんて甘露な舌ざわり
中嶋秀次郎(埼玉県)
- 285 しげしげと河馬の鼻みる姉おとうと
佐藤古城(埼玉県)

心に残った作品



毎号募集しております。投稿作品で心に残ったものは？の問いに、たくさんのお返答をお寄せ頂きありがとうございます！
その中で特に多くの評価を集めた作品と、それを選んだ理由の一部をご紹介します。

17 母百歳手に余りたる年の豆

大久保アヤ子(東京都)

・百才の母、その子も相当な齢でしょう。母を慈しむ心情、食べないがこれだけの数よと見せているのでしょうか。温い親子の絆 原田麦吹(埼玉県)・おめでとう御座います。おもしろいです。いろいろあったでしょうが今、幸せそうです。 佐瀬チエ子(神奈川県)・百歳の母上は年の豆を召し上げたのだらうか。それともただ眺めていらしたのか。御長寿の母上がいらして羨ましいです。 紺谷睡花(東京都)・百歳の母のこにこしているお顔が浮かんでくる 藤沢樹村(東京都)・母を早く亡くした私には羨ましい句。手のひらいっぱい豆が目に浮かびます 秋谷静子(茨城県)・人生50年の時代に生をうけ現在は百歳。語り尽せぬ思いもあるう。一日でも多く生きて欲しい 百花清(埼玉県)・いくつになっても母想う心は皆同じなのかな 辻升人(東京都)・古来日本では年の数だけ食べるのと長生きできるといわれていますが。これは年をとつても年の数だけ食

べられるよう平素から心がけようという事です。手に余るで親しいの気持ちがよく出ています 針ヶ谷里三(東京都)・義母百一歳で召天しましたがお元気なお姿が見えますね 柳澤京子(宮城県)・お元気な百歳が今大変多い日本です。ふと自分も豆を拾える百歳を目指したいと思う 伊藤みさ(静岡県)

【自句自解】

「光陰矢の如し、年を取ると月日のたつのが早いネ。正月が過ぎたと思つたら、もう今日は鬼やらひの日だね」と母の声。「お母さん百歳だから豆百粒よ」差し出す手の平に一二二三と数を数えて「ハイ百粒」。母は「福の豆だからもつとおくれ」。私は手に余たる豆をあげた。母の嬉しそうな笑顔。「何時もよくしてくるから長生きしているんだよ」何時もの口ぐせの感謝の言葉。家には鬼がないから、声を揃えて福は内、福は内、福の豆——楽しい一時でした。

20 かたちあるものに影あり日脚伸ぶ

吉田未灰

・あたたかさのあふれている句 寺尾令子(東京都)・「かたちあるもの」それは森羅万象地上にあるものの影に刻々日が伸びる 高杉杜詩花(北海道)・日脚伸ぶで景に広がりが出た 新井竜才(埼玉県)・よく物の情景を見ている 田島星景子(宮城県)・見事な写生句 渡辺嘉幸(東京都)・生きている歓びがある 望月哲土(東京

都)・遅々とした移ろいの中にも確実

な自然の現象を見出す目 池本勇
(大阪府)・あたり前の事をあたり前
に詠む面白さ 本間七窪子(山形県)

105 春立つやひらがなだけの便りくる

堀たか子(大阪府)

「ひらがな」の手紙と春立つとがよく
合つてほほえましい思いがします 三ツ

木宗一(東京都)・果して書き手はお
孫さん?それともふるさとのお母さん

かな? 坪田勝秀(鹿児島県)・孫四
才から同じように鏡文字もあり来た

ので同感…。 勝田久美(大阪府)・四
月に入學するお孫さんからの便りで

しょうか。ほのぼのとした暖かさを感じ
ます 早川レイ子(新潟県)・幼稚

園児ぐらゐのお孫さんの便りでしょう、
ほ、え、ま、し、い、 村松知津子(大阪府)・

ようやく字を覚えたかわいい孫からの
便りだろうか。「春立つや」が効いている

宮川昭男(高知県)・便りというもの
はうれいしいものです。何度も見て思い

を馳せている様子が見える 石川郁
子(埼玉県)・幼い子の祖母への便りか

一生懸命の様子が浮かんでくる 竹
澤茂子(大阪府)・私もひらがなの手紙

が大好き。少しずつ漢字もまじりまし
た 近藤美好(新潟県)ほか

241 天国も大雪ですかと問いかける写

真の中の義父の笑顔に

若月理依子(新潟県)

大雪に苦しむ日々、亡父も雪下しに
苦労した。その思い出と父様の情がよ
く詠まれている 猪股凡生(新潟県)・

作者の心が良く表現されている 相

馬竹浪(新潟県)・厳肅な中にユーモア
がある 北岡晃(兵庫県)・四月になっ

ても雪が舞い散る今日も作者も天国
も大雪ですがと問いかけているので

三浦博(岩手県)・自分もそんな体験
をしたことがあるので… 阿部澄江

(宮城県)・現実にはないが、あると思つ
て義父に呼びかけるやさしさ 小島

秀雄(福島県)

◎その他にも、こんな作品が挙げられていました。

5 志高く持ちたし日脚伸ぶ

井原稔子(東京都)

165 春耕の田はゆつくりと息を吐き

鈴木蝶次(宮城県)

194 余生にもときめき欲しき春の風

岡村君枝(茨城県)

279 片思い逢える予感の廻り道

大岩歌子(岡山県)

※今後もあるのでご投稿をお願いいたします!

前回の訂正

58 ↓「心に残った作品」としてお寄せいただい
たものでした。

95 ↓正しくは「還付金二万なにかし鯨鯨鍋
井上静夫(栃木県)」でした。

96 ↓正しくは「入口に標を置く野鳥園
伊藤良三(岩手県)」でした。

152 ↓正しくは「便秘して考へる人長考す
大井光隆(神奈川県)」でした。

以上、訂正してお詫び申し上げます。

☆なお、作品は原稿通りに掲載いたしま
す。楷書にて、はっきりお書きいただく
とともに誤字脱字、作品の記入欄等間違
いなきよう、くれぐれもご注意ください。

詠み人スクランブル

前回のアンケート

Q: 雨は好き? 嫌い?
みなさまの回答を見ている
だけで、楽しくなってきました。

「好き」

木の芽雨、花の雨、若葉雨とそれぞれ風情があ
り気持も落ち着く 北嶋八重: 他多数

「五風十雨」適度な風と雨が農作をもたらす、大切
です 津田忠彦/スケジュールの変更は困るが
嫌いではない。心がおちつく 松木建二/雨音

よく眠られる 稲葉民雄/特に春雨が好き
三浦博/雨の日アジサイとトクダミの間の薄

暗い闇に心が落ちつく 戸田英夫/雨の日は佳
い事が一杯。音も無く降る雨は詩情が生まれる

原田麦吹/「五月雨」がいい 千代田栄次:
他多数/忙しく暮している者への休憩時間とも

… 秋谷静子/さまざまな雨に心を添わせて
楽しく過ごします 吉田ゆき/気持が落着い

て何かに集中出来る 神作洗江/静かに読書
したり歌を詠むには最高 櫻井文子/大好き

な長ぐつが履ける 石川郁子/彼女と二人な
ら最高 五十嵐睦博/雨は詩情豊かなロマンの

表現と結びつき好き 須澤重雄/時雨と雨上
がりのさわやかさが大好き 有坂馨園/口実

に昼寝できる 田沢義武/雨降りは畑に出な
いので専ら読書 山東爺/雨も又良き哉という

心境になりました 植野無人/ゆつくりと絵
手紙が書ける 大場きよし/何もかも洗い流

してくれる 吉村筑紫/花や木が喜ぶから
樋口孝子/演歌につきもの 中川平治/考え

ることが可能 勝田久美/若芽の頃のしずかに
降る細い雨 藤井春三/少年は農手伝いが休
みだった 村瀬憲正/心が落ち着く 松嶋光

秋/特に雨上がりの後陽の光にさんざめく草

木の囁きに心が晴れ渡ります 村木尚/野菜
果物できず、梅雨なくはお米できず 宇田川正

雄/落ち着いて読書ができるから 斎藤和子
: 他多数/利休色の雨 新居田郁夫/降ると

も見えぬ春雨と夏の大夕立は大好き 百花清
/若葉の季節の明るい雨が好き 棚橋麗未/

春の雨はいい。五風十雨が一番 佐藤君夫/床
に入っている時のやさしい雨音 長島保子/雪

より雨は好き(喜雨) 福岡悟/雨の日は畑仕
事も出来ないで心ゆくまで雨の中をゆつたり

と歩き句作が出来る 山岸伊久雄/春雨じゃ
ぬれていこう 久保和友/日本は雨が多い国で、

それだから豊かなのだと思う 忍正志/百姓
の私には雨は恵みの水、大好き 藤原昭三/四

季のある事に感謝 堀井和/野菜を思うと好
き 小島秀雄/大風より雨の方がよい 大久

保アヤ子

「嫌い」

外出がままならないので雨は嫌い 大橋絵代:
他多数/雨の中バイクはつらい 梅澤鳳舞/ア

ウトドア派にとつていやな天気 長峰正晴/
仲々現実には「晴耕雨読」の字のとおりにはなら

ない日常 中村和弘/ウォーキングをやっている
ので雨は嫌い 北岡晃/足が少し悪い為、出歩き

に不便 檜山とり子/雨の多い北陸生れなので
好きではありません 勢藤隆/心まで冷えて

来ます 竹内ハヤ子/雨でも出かけなくては
いけないから 中野博夫/大切なこと百も承知

でも太陽が好き 山本直子/嫌い、それでも日々
是好日で 岡部則正/①雨で予定が狂う②雨
の日は気温が前日と大きく変わることが多い
野中良巳/あまり良い事を考えません 野村
牟人/ゴルフに困る。畑に出られない 津布久
信雄/嫌いしかしほっとする 炭崎博/雨の

A Q U E S T I O N N A I R E

中のスポーツは気の毒 居原田連星／何と言っても晴天は良い 藤田照代／何故か淋しく感じるから 増田とみえ／気分が滅入る 中岡昌太／植物や自然原理では降った方がいいが、やはり行動が鈍る 山口良子／持病が悪化するの、高橋トミ子／仕事にさしさわるので嫌い 長尾俊彦／小中学生の頃生活の為に新聞配達をやっていた。雨の日に大人のカッパを着せられても新聞を待っている人がいるという事で雨の中を行ったそのつらかった事 辻升人／昔は好きだったが今は嫌い 早矢仕那夫：他複数／本質的に嫌い。通り雨の後のスカッとす晴れ間は爽快 布目雅之

「好きではないけれども？」 中くらい：「？」

雨は好きではありませんが農作物や草木、飲料水のことなど考えると嫌いとはとても言えません 川崎洋吉／ヒマな時はいいですね 大江秋月／春雨だけは好きです 藤沢樹村／雨水がなければ人間生きていきません。又、俳句を作る上で色々な雨も良い句材となります 小田眞佐代／雨は嫌いです、農業を始め矢張り恵みの雨は必要ですね 羽根田明／もともと嫌いです、適度な雨は必要だし、俳句の題材ともなるし今は中位 岩村昇／雨が降らぬと困りますので程々の雨を期待します 羽田桐柳／雨にぬれることが嫌いですね。しかし自然界には雨も大切です 五十嵐勝敏／雨は好みませんが必要不可欠です。①作物に②空气清新にと 内河邦久／総体的には嫌いであるが、万物雨がないと生きられない。夜降って朝昼上がるのは最高によい。冷たい雨、梅雨の雨は最も嫌である 菅井文男／本当は雨は嫌いです。でも農耕のためにはそうも居っておられない 磯村鉄夫

「こんな雨なら好き、こんな雨が嫌い」

春の雨は好き 冬の雨は嫌い 三ツ木宗一／心身ともにゆっくり老体を休める。雨風は嫌い 重原昇／紫陽花の雨の様に好き嫌いはないが

梅雨の様に長く続く嫌になる 野木宗信／長く続く雨はいやですが晴の日が続いた後はホッとして雨に感謝 塩田澄子／雨に洗われた後の景色は大好き 桑原謙一／長雨はいやですが、雨の日は人の心も植物もうるおう 春口蓮男／長雨は嫌い 武田東洋一：他多数／風がなくてしっとりとした雨は好き。風が強くて風みたくない雨は嫌い 井原穂子／忙しい時の雨は予定を狂わせるので苦手 本間七窪子／恵身の雨。風情のある雨は好きだが、どちらかといえば嫌い 宮川昭男／春雨、穀雨、しとしと降り、情緒ある詩的な雨は好き 能條憲夫／「恵みの雨」以外は御免 大竹和男／「眺める」のは好き 矢野絹枝／ヴェルレーヌの詩のような「雨」は好き 神田九十九／しとしと降る春雨は心が鎮まってく。大雨や風が吹いたりはキライ 紺谷睡花／しとしと雨は好き 柳澤京子：他多数 そば降る絹糸の様な春雨は詩心を秘めていて好きですが、傘を打つ様な雨は嫌い 大下志峰／そば降る小雨は風情がある 今井忠一／やさしい雨は好きだけれど大雨は嫌い 竹澤茂子／一人ぐらしの時は雨の休日ばーっとしているのが好きだった 若月理依子／一人の雨は好きになれませんが娘と歩く雨は大好き 富山尚子／心和む春雨は佳いものだが氷雨は嫌 北村富士雄／雨に濡れた草木花は美しい 藤田君江／静かに降る雨ならよい。早川レイ子／煙れる如く：歌った。静かな雨は好き。雨の後の、木々の葉の照りが美しい 山本せつ子／花と花木を育てているので春の雨と夏の酷暑から一刻開放してくれる夕立が好き 相馬竹浪／現実の雨は嫌ですが、歌詞に出てくる雨は好き 仁藤ひろじ／四季の雨、量にもよりますが好き 原田かずゑ／慈雨は夏の暑さにはとつとつする 北野耕兵／「春雨や濡れて行く」のせりふ(新国劇)いつまでも口ずさむ 伊藤修敬／最近の寒い雨はいやですね 村上千代／春雨は好きですが、氷雨は嫌い

四宮陽一：他多数／春雨は少し好き。生きもの待ち焦がれるから 沢井博／小雨なら好き 菊池シユン：他多数／小雨は気になりません 帽子ささえあれば 近藤はつみ／小雨の土地がから雨を待つ心持が強く好き 吉澤昌美／小糠雨は心が安まるから好き 清水喜代子／新緑の頃静かに降る雨は好き 丸山ちづ子／晴の日と違った様子があるので好きな時も 梅津陽子／静かな雨が好き 駒場京子／草木を緑にし、花を咲かせる春の雨は好き 井上静夫／適度に降る雨は歓迎 神一男／俳人の立場で好き 木山杏理／梅雨はうとうとうしいというイメージがありますが、「あじさい」に降る雨は好きなもののひとつ 岩崎令子／風を伴わない雨は総じて好き 今井勝子／毎日続く梅雨は滅入るが雨を呼ぶにおいと共に走っていく夕立は大好き 奥那於子／葉桜に降り注ぐ春のやわらかい雨は心が和みます 西村けい／雨上りは、周りの空気がきれいになってすがすがしい 竹内進／御殿場の秩父宮公園通りの標道は楽しい 浜田蛙城

「どちらでもない、よりけり」

好きですが毎日はこまる 小路ふじ子／雨によりけり 田中敏晴／その時々的心情で、好きになったり嫌いになったり 坪田勝秀：他多数／ときとして人は慈雨と言い、時には邪魔な雨と思う、勝手なものです 池本勇／外出時に雨は困るし、好きとも嫌いとも言い難い 須田洋子／雨の降る時の条件により好きにも嫌いにもなる。一概にはいえない 佐野和彦／生きていく上で必要。あえて言えばでかける日の雨はきらい 齊藤安弘／雨はときにより好き、ときにより嫌い。俳句をやるにはどちらでも可 真貝葉月／雨は五分五分です。花見の時や、孫の運動会には、雨は降らないでほしい 松尾正一／年をとるにつれてあまり好きではなくなつて来ている 林克／雨は週に一度適当に降ればよい 寺岡文生／雨を、好き嫌いで決めるのは非常に難しい 田野井一夫／外出の予定がなければ好き 大阿久雅子：他多数／嫌いではないがうんと好きということでもない 浅野信廣／たまの雨はほつとゆつたり落ち着く 小山恵美子／嫌いではない。巾のある道を孫と傘をさして歩きたいな 星一子／嫌悪なき存在である 小俣英之助／好き50%俳句制作中に、嫌い50%用事あるなかにて 諏訪杜夫／好き嫌いは状況における主観だから、動かぬときは好き、動くときは嫌い 緑川浩明／好き嫌いより少ない方がいい。情緒あり、詩歌等題材となる 田中昶／好きー野菜作り雨・霧雨嫌いー行楽雨・豪雨 早川述史／好悪、相・俳人は好き嫌いはいつていられない 白井無窓子／小雨に相合傘で歩くのはいい。でも基本的には晴れの日がいい 梶鴻風／時により好きなこともある 古郡孝之／柔らかな雨は良いのですが風雨は嫌い 渡邊昭雄／心境によつてどちらもある 木下精／新緑の季節、そば降る雨は心が和む 富井英雄／草食民族ですから嫌いだということはない。但し大雨となると昔も今も災害で苦しんだ。イエスカノーかでは農業から見て半半 青木日出男／日常生活では嫌い！でも俳句を作るときはそれも好し。吟行も荒天なら荒天で嬉しい 佐藤信／農家なので作業によつて好き嫌いという気分 伊藤梅子／夜半の雨は睡眠時の子守歌。日中の雨は出鼻を挫かれて駄目 山本敏順／「好き」「嫌い」と問われても：「卯の花腐し」干天の慈雨もあり 浦俊雄／むずかしいなあ。春雨・梅雨・雷雨・時雨等々いろいろ有るもん 大西敏正

「その他」

私は晴れ女。雨の方が私を避けているよう 堀たかこ／天の配材いかなる天候も楽しみに変えます 鈴木清美

◎「好き」「嫌い」の設問自体に難があったようです。次回「夏を感じる瞬間は？」です!!

花月館貞雄を偲ぶ

古谷 力

明治初期の俳諧師は、幕末以来の有名な宗匠、月の本為山・小築庵春湖らを中心とする俳諧教林盟社と、新進の三森幹雄を盟主とする俳諧盟倫講社の二大組織に編成されていた。

千葉県では、北総には椿月杵(下総町)、東旭斎(佐原市)らをはじめ盟倫講社系の俳人が多数活躍し、上総では教林盟社系の俳人が多かった。

上総下布施村(大原町)の三上貞雄は明治十三年(一八八〇)教林盟社の分社として共研社を創立し、地方俳壇の統一をはかった。明治十五年(一八八二)、貞雄は小築庵春湖、夜鶴庵覚斎の両宗匠から立机の免許を受け、花月館を名乗り機関紙「花月集」を創刊する。県内をはじめ全国各地の俳人と交流を深めると共に、地域への普及をはかった。この披露句会に集った俳句は八千余句に及んだ。

明治四十三年(一九一〇)、「新派」俳諧の台頭に押されて教林盟社は解散するが、共研社は花月社として再編され継続していった。大正十四年(一九二五)、花月館貞雄翁の古稀祝賀、「花月集」第三百回記念俳句集が催され、一万四千余句が寄せられた。この年十一月に貞雄翁は死去するが、その子兼雄に受け継がれ、昭和六十年(一九八五)まで活動を続けた。その間昭和四十三年十二月一日に「花月集」第五百回記念句集が出版された。

花月館貞雄翁の俳系は、左図の如くである。



ここで花月館貞雄翁を紹介するが、筆者の妻やよひが、祖父貞雄翁の有様を

聞き及んだことも述べた。

貞雄翁の家系は、古文書の巻物(筆者所有)に詳しく述べられている。三上判官藤原兼胤といふ九州筑紫の神官をしていた。ある日中納言藤原兼貞郷と共に海へ釣りに出て暴風のために琉球に流されて救助を受けた。帰路再び流され、上総の岩船(大原町)に上陸して九州まで帰ることができずに土着したものである。弘安二年(一二七九)御宇多天皇の時代で、それ以来この地に居住したのである。

この地には今でも多数の三上(もとは三神)姓がある。八百年余の長い年月に分家に分家を重ねた家系から学問は父子相伝によつて後世数世代に及ぶ俳家となり得たのであろう。

さて貞雄翁は、明治三十三年(一九〇〇)四月関西、四国方面の吟杖に出た。大正六年(一九一七)花月社社員が四百余名となり隆盛を極め、老妻を同道して、門下の花豊庵梅里を伴い東北漫遊の旅に登る。続いて大正七年(一九一八)に再び老妻を伴い、関西遊覧の長途に上つて吟遊した。

現在のような吟行は、往事も盛んで万余の句を残しているが、中から二句を紹介する。

我が魂と見よ春は花秋は月

貞雄

この遺吟は、貞雄翁の広大な敷地内にある大慈寺に没後大正十五年(一九二六)句碑が建てられた。

荒浪の上に澄みけり夏の月

貞雄

この遺吟は、昭和三十四年(一九五九)大原海岸八幡岬に高さ丈余の石碑に大書されており、門下生により顕彰された。夏の烈しい暑さの一日が過ぎて、広い太平洋の浪がごうごうと吠える。海も空も暮色の空間に大きな黄金色の月を見た時の驚きを目の当りにした様子が想像できます。終りに一句を捧げます。

更衣して浦風と遊びけり

力

新潟ぶらり

坂口安吾文学碑

新潟市護国神社

二〇〇六年は坂口安吾生誕百周年にあたり、地元新潟では「安吾賞」設立や生誕碑建立等があった。二〇〇九年の「安吾賞」は俳優渡辺謙さん。「反骨と飽くなき挑戦者魂の安吾精神を發揮する」「日本人に大なる勇氣と元氣を与え」「明日への指針を指し示すこと現代の世相に喝を入れる」(安吾賞宣言文より)とする賞の趣旨にふさわしいとして選ばれた。

ふるさととは

語ることなし

安吾

『墮落論』、『白痴』等数々の名著を残し、新潟が世界に誇る坂口安吾。安吾にとつて「ふるさと」とはどんな重みがあったのだろうか。

碑文は昭和二十九年に新潟を訪れた際、ある依頼を受けて書かれた色紙がもとになっている。他に「雪も新潟の雪は変に親切すぎる」「コタツはガサツで親切すぎてイヤなものだが あたらぬわけにもいかぬ 悲しい新潟」が書かれた。安吾の親しみのこもった深い愛情なのだなあと感じた。

西大畑町にあった安吾の生家は、現在は残っていない。近くにある砂丘は、秋から冬にかけて猛烈に吹く風によつ



▲坂口安吾文学碑

て砂が舞い上がるため、江戸時代から松が植林されていた。安吾の生家は、この飛砂を防ぐ松林に囲まれて建てていた。砂丘は、幼稚園時代の安吾の遊び場だった。安吾は自伝的小説『石の思』に、「私のふるさとの家は空と、砂と、松林であった。そして吹く風であり、風の音であった」と書いている。旧制中学(現・新潟高校)に通っていた頃も、彼はよく学校をサボつて近くの松林に行っていたとか。

参考文献／「安吾のいる風景」坂口綱男
「食の文学館第6号」紀伊国屋書店

新潟市護国神社
住／新潟市中央区西船見町浜浦
5932300

堀と柳の句碑めぐり

新潟市中央区古町

堀の町でありし新潟柳の芽

茂野六花

(句碑・西堀「イタリア軒」前)

新潟市中央区古町。新潟の中心地であるこのまちには、かつて堀がめぐらされていた。港で栄えた新潟、堀は船の物資の運搬に使われ、町の動脈ともいえる役割を果たしていた。江戸時代にはそのほとんどが完成していたという。小船が行き交い、縁には柳がゆれて——と、風情のある町並みであったことが想像される。ここを訪れた俳人は堀や柳を詠んだ。

柳あり橋あり杖のとめどころ

太田木甫

(句碑 西堀「NEXT 21」付近)

城もなく、町人の自由な雰囲気につつまれたこのまちは、多くの文人に愛されたという。長野から来新した太田木甫も、「ちよつと泊まつていこうかな」という気持ちになったのだろうか。

ちなみに、江戸時代から三都に次ぐ遊郭を持ち、昭和初期には新橋・祇園と並んで三大花街と呼ばれるようになったのがこの古町で、現在も鍋茶屋、行形亭、かき正といった高級料亭が並ぶ。私はお大尺ではないので、古くて立派な日本家屋の佇まいを外から眺めるだけだが、趣深い小路をぶらぶら歩いているとそれだけで楽しい気分になる。

それこそ入ったことはないが、かき正の創業者はホトトギスの同人で、高浜虚子や中田瑞穂、高野素十らと(勿論かき正で)句会を開いたという話を聞いた。美味しい料理に知的なお話で盛り上がったことだろう。

かつて美しかったであろう堀も地盤沈下の影響等で状況が変わり、昭和三十九年に埋め立てられた。現在は道路になつておりその姿を見ることはかなわないが、「西堀」「東堀」といった名や柳は未だ残されており、当時がしのばれる。

西堀の夜風さは夏柳

蒲原ひろし

(句碑・西堀「イタリア軒」前)

夏柳を見に、またふらつと古町に出かけようかなと思つている。(菅真理子)



ライブ至上主義

岸本尚毅



落語評論家の堀井憲一郎によれば、落語は「弱い芸」です（『落語論』）。客席で誰かが扇を使い、それを見た落語家の気持が僅かに萎えただけで、観客を含む落語全体の「空気」が乱れ、落語家が観客に向かって放つ「気」が衰えてしまう。文字や録音になったものは本当の落語ではない。落語家と観客が一体となり、落語という「音楽」が心地よく響く異空間に観客全体が包まれるのが落語という現象だ、と堀井は言います。

このような堀井の考え方は、落語における「ライブ至上主義」です。ライブ至上主義者の堀井は、真の意味で落語が成り立つのは特定の場所（東京の下町）においてであつて、そこを離れると真の落語は成り立たない、とさえ言います。真の落語は、どこかの原生林でしか生息できない珍種の生物のような存在なのでしょう。CDやDVD、活字などの形になった落語は亜種の「落語もどき」なのでしょうか。

俳句も落語と同様、「場」あるいは「座」というものを引きずっています。連句の運座はもちろん、俳句愛好家が行う吟行や句会のような場では、ライブとしての俳句が成り立っています。

逆に、雑誌や句集によって活字化された俳句は、CDやDVDになった「落語もどき」ならぬ「俳句もどき」ということになるのかもしれませんが。

前回の4月号にも、お見事、ユーモアの中に品格が、笑い転げて元気に…など一番多くの感想が寄せられたこのコーナー。惜しまれつつも、次回からは女性の若手俳人へバトンタッチ。ぜひお楽しみに！

近代以降、俳句の活字化が進みました。高浜虚子の「ホトトギス」に代表される俳句結社は、選句欄を持つ全国版の月刊誌という媒体によって、俳句の活字化・大衆化・全国化（地方化）を推し進めました。

その結果、近現代においては、「活字になったときに見栄えがする俳句」が名句とされました。たとえば

芋の露連山影を正しうす

飯田蛇笏

くろがねの秋の風鈴鳴りにけり

飯田蛇笏

などは、活字として颯爽としています。蛇笏の句は、かつきりとした、格調高い俳句です。明治文学の空気を吸った蛇笏は活字の人でした。逆に、

顔に似ぬほつくも出よはつ櫻

芭蕉

などは、活字になるともたもたした感じで、その背景にある「座」をしっかりと共有していないと享受出来ない俳句です。芭蕉のいう「文台引きおろせば即ち反故」とは、俳句におけるライブ至上主義宣言でした。

とはいえ、いまさら活字以前の俳句に戻ることはできません。俳句の活字化は「一句独立」という命題を俳句に課しました。近現代の俳句は、活字化を通じて、ある意味、鍛えられました。一方、活字化によって何が失われたか。その問いもまた、忘れてはならないと思います。

●プロフィール

1961年 岡山県生まれ。1979年 東大学生俳句会入会。小佐田哲男、有馬朗人、山口青邨の指導を受ける。結社誌は「渦」「青」「ゆう」に参加（いずれも終刊）。現在「天為」「屋根」同人。句集に『鶏頭』『舜』『健啖』『感謝』。著書に『名句十二月』『俳句一問一答』『俳句の力学』などがある。第16回俳人協会新人賞、第23回俳人協会評論新人賞を受賞。

2010. 6. vol.50 (2010年6月10日発行/隔月発行)
 ●発行・印刷/株式会社ミュージーズ・コーポレーション
 〒950-0801 新潟市東区津島屋 7-17
 TEL 025-250-9555 FAX 025-250-9550
 喜怒哀楽書房 株式会社ミュージーズ・コーポレーション
 ☎ 0120-819-395
 e-mail odp@eseihon.com / HP http://www.eseihon.com

編集後記

50号と一口に言っても活字にできないようなお恥ずかしい歴史もあったような。たかだか50号でヒーヒー言っているのだから、おさまの通巻500号、30周年記念合同句集等から見たらケシ粒ほど。ちなみに新潟の離婚率の低さは6年連続全国トップ。新潟女性に形容される「しんなら強さ」（一見たおやかで弱々しく見えながら、実は粘り強い）の結果と分析されているが、個人的にはこの範疇から大きく外れる。が、離婚率の低さには貢献！でもこれは慣性の法則が勝った結果と周囲の支えの賜物。「喜怒哀楽」もおさまの支えがあつてこそ。時に加速度をつけたり、減速しながらも惰性ではなく走り続けます。（木戸敦子）